

米国

金融政策動向（2022年6月 FOMC）

約27年半ぶりに0.75%ptの利上げ、軟着陸はさらに難しく

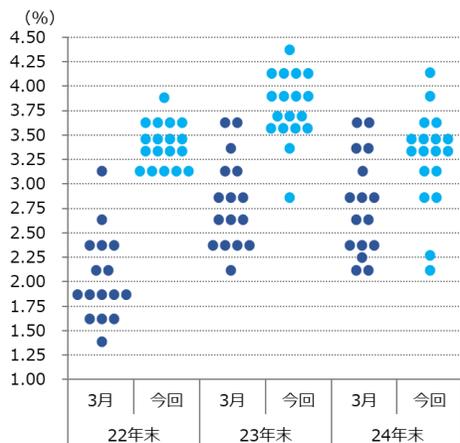
政策・経済センター
田中高大
03-6858-2717

1 FOMC参加者の経済見通し

		前回（3月）	今回
GDP成長率（%）	22年	2.8	1.7
	23年	2.2	1.7
	24年	2.0	1.9
PCEインフレ率（%）	22年	4.3	5.2
	23年	2.7	2.6
	24年	2.3	2.2
失業率（%）	22年	3.5	3.7
	23年	3.5	3.9
	24年	3.6	4.1

注：FOMC参加者の中央値。各委員の予測の集約であり、FRB公式としての予測ではない。出所：FRB

2 FOMC参加者の政策金利見通し



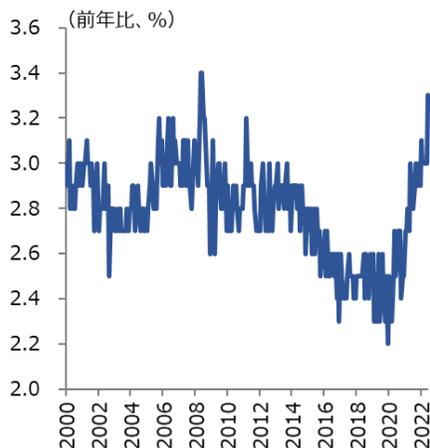
注：ドットは当該水準が政策金利のターゲットとして適切であると考えられるFOMC参加者の人数を示す。出所：FRB

評価ポイント

決定事項・経済見通し

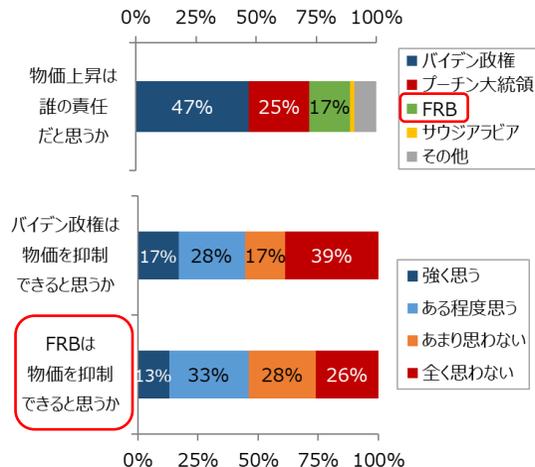
- 6月14-15日のFOMCの結果、政策金利を0.75%pt引き上げ、誘導水準を1.5-1.75%にすると決定された。0.5%ptの引き上げを求めたのは一人だけだった。一度に0.75%ptの利上げは27年半ぶりである。
- FOMC参加者の経済見通しでは、22・23年の成長率が大きく下方修正、潜在成長率を下回ると予想されている（図表1）。
- 政策金利見通しでは利上げ予想が引き締め方向にさらにシフト、22年末の金利水準の中央値は3.4%となった（図表2）。3月に比べて予想の分散も低下している。また、23年末は3.8%、24年末は3.4%と予想されている。
- パウエル議長は記者会見で、7月のFOMCでも0.5または0.75%ptの利上げを示唆、以前に比べて経済の軟着陸が難しくなっていることも認めている。

3 家計の期待インフレ率（5年先）



注：直近は22年6月（速報値）。
出所：ミシガン大学より三菱総合研究所作成

4 FRBの物価抑制に対する信頼



注：5/18-19実施。
出所：Harvard-Harrisより三菱総合研究所作成

今後の注目点

- 今回27年半ぶりに0.75%ptの利上げが決定され、FRBの物価抑制姿勢がさらに強まっている。前回5月のFOMC時点では0.75%ptの利上げの可能性を否定したものの、先日公表された5月のCPIがエネルギー価格の高騰によって伸びが上昇するなど、インフレの鎮静化が進まず政策修正を迫られた形だ。
- FRBが重視する中長期の期待インフレ率は、ここ数カ月落ち着いていたが、6月の速報値で上昇、14年ぶりの水準になるなど警戒感が高まっている（図表3）。また、インフレ抑制のためには「FRBへの国民の信頼が必要」と述べたが、5月時点の調査ではそれも高いとは言えない（図表4）。
- 今回のFOMCの結果から、FRBの方針転換が伺われる。段階的に金利を引き上げインフレと経済の両立を図る、従来の軟着陸路線から、一時的に経済を潜在成長率以下に下振れさせてでもインフレ抑制を優先する路線への変更である。インフレ抑制と景気後退回避のバランスをとる難易度が一段と高まっているが、前言撤回もいとわず、物価・経済状況をみながらインフレ抑制に向けて柔軟に利上げ幅を調整していくこととなる。